Osaka University Knowledge Archive

Title	異文化交流の中の茶 : 岡倉天心とアメリカ
Author(s)	大和田, 範子
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54019
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（大和田範子　　）	
論文題名	異文化交流の中の茶―岡倉天心とアメリカ―

論文内容の要旨

本論は、150 年前に日本が遭遇した西洋列強の植民地侵攻によるグローバリゼーションの中で、岡倉覚三がアメリカのボストン美術館に勤務しながら、日露戦争勝利に向けて、東洋美術専門家として芸術文化の分野からどのように活動し近代化に貢献したのかを明らかにするものである。具体的には、何故『茶の本』が書かれたのかを中心に岡倉の斬新な日本主張を鑑みる。

本論文で新しい側面は、何故東京美術学校を罷免解雇されたのか、何故『茶の本』を書いたのか、何故「茶」をテーマとしたのか、の三点である。東京美術学校校長罷免は岡倉を中傷した怪文書によるもので、調査はほとんどされていない。そこでこの解雇が岡倉のボストン人脈に注目した日本政府が、岡倉をアメリカへ派遣するため解雇にふみきたのではないかと推測し、解雇までの数年前に予兆があったことを明らかにした。彼のアメリカは日本からの逃避行であるといわれてきたが、これはそれをくつがえす結果である。何故『茶の本』を書いたのかについて、この本はアメリカで着想したもので、

そのきっかけは、セントルイス万国博覧会での臨時講演である。7 月に依頼があり、9 月の発表が決まったが、アメリカですでに同時期政治性の強い内容の『日本の覚醒』の 11 出版が決まっていたことから、趣の違う『絵画における近代の問題』を選んだと考えられる。この講演の最後に藝術鑑賞と日本の茶道の宗教哲学に触れ、満場の拍手を得て、半年後に、茶をテーマとした「The Cup of Humanity」を雑誌に掲載するがこの時新しい本の出版契約をしたことから、『茶の本』完成につながったと考えられる。『茶の本』は西洋列

強を意識して書かれた本であり、先行研究で言われる単なる平和的な伝統文化の紹介ではない。「茶」をテーマにしたのかについて、ボストン美術館で多くの日本コレクションに触れた影響が大きいと考えられる。このようなことから岡倉のアメリカでの活動は、日本政府の政治外交政策にかかわった渡航であり、そのために校長罷免解雇が行われたといえ、日本からの逃避行の説を覆すものである。以上本論文では政治外交問題と茶道芸術文化の関係に焦点を当て新しい岡倉覚三像を求めた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　大和田　範子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	W.シュヴェントカー
	副 査	教授	中山　康雄
	副 査	教授	檜垣　立哉

論文審査の結果の要旨

本論文は『異文化交流の中の茶－岡倉天心とアメリカ－』と題され、課題は以下3点からなる。1、岡倉天心はどんな理由からアメリカへ渡ったのか。2、なぜ、『茶の本』をアメリカで執筆したのか。3、明治後期に日本の伝統文化を普及させる為にどうして“茶”を選んだのかを考察する。“異文化理解”の理論的アプローチとの関連と日米の美術館、博物館、資料館所蔵の数多くの文献資料を基に、これまで取り上げられなかった政治外交的視点を加え、新しい岡倉天心像を示している。

本論文は、六つの章から構成されている（これに序文とまとめが加わる）。第1章は、近代化以前の日本の茶の文化は西洋でどのように記録されていたかを明らかにしている。本研究はマルコ・ポーロの『東方見聞録』から江戸時代末期の開国までの何百年にも及ぶ歴史の中で茶は日本人の教養とみなされていた。特に17世紀初頭にポルトガル人のイエズス会士のJ.ロドリゲスによる『日本教会史』で初めて日本社会における茶の観念の兆しが記述され西洋に紹介された事を、強調している。

第2章では、岡倉天心が国際人としての基礎を養い、学生時代には国家と美術との関連に関心を持ち、さらに文明開化の明治初期における日本の西洋化と近代化をどのように経験したかが論じられている。哲学者アーネスト・フェノロサは日本伝統美術を高く評価し、文化財保護法の前身の制度に尽力したとされている。フェノロサの日本滞在中に同行し手助けするなど深く関わった事が天心へ大きな影響を及ぼしたと指摘している。

第3章では岡倉の「転換期」についてである。1898年に東京美術学校校長を不当に解任されたが、文化政策の業績を多く持った岡倉は「日本美術院」を創設し、また幾多のインドと中国旅行で得た膨大な知識を駆使し、フェノロサを通してボストン美術館の中国・日本部のキュレーターとして職を得る事となり、影響があったと論じている。

第4章は「Okakura's America」と題し、1904/05年のアメリカ滞在中の活動について論じている。ニューヨークタイムズのインタビューやホワイトハウスの夕食会に招かれ、アメリカ大統領のルーズベルトと接触していた事やニューヨークやケンブリッジで新しい日本美術の絵画を問う個展を企画し成果をなした事をたどる等々、これまであまり公になる事のなかった事柄に触れ、岡倉天心をさらに深く掘り下げる事に成功している。又、岡倉がアメリカのボストン美術館のキュレーターとして影響力を持っていただけでなく、日本政府との外交的文化政策に大いに貢献していたとし、本研究にとって重要な結果を示唆している。

第5章では、ボストン滞在から帰国すると岡倉が『茶の本』をなぜ書いたのかを説いている。1904年のセントルイス万博博覧会で日本美術について講演した際に、新しい視点で日本文化の土台を考慮するきっかけを持つ事となった。又、20世紀初頭の政治的・文化的背景から西洋文明偏重への抗議と伝統を重んじる東洋文化が理想であると主張し、『茶の本』出版の着想につながったと指摘している。

第6章では「東アジア共同体」に関する新しい論争を背景に岡倉研究の最新意義を考察する。1920年代と1960年代の岡倉研究の2大現象以降、異文化理解に関して論争となる第3の動きがある。この動きは汎アジア主義思想に対する岡倉が抱くアジア観（岡倉の格言「アジアは一つ」）はどのような影響を与えたかという問いが日本や海外で最も主流である、と論じている。

「まとめ」においては、ボストン美術館の日本伝統美術コレクションの保護維持や日清・日露戦争の後にアメリカで日本の絵画に好印象になるようにマスコミへの活発な活動で彼の功績は異文化理解を促す目的に貢献していると申請者は強調する。日本文化への岡倉論は20世紀初頭の外交的文化政策の一部であり、他の英文著作『東洋の理想』『日本の覚醒』と『茶の本』とを関連づけ、斬新な岡倉の主張に光を当て、これまでの岡倉像に新たな側面を加える事に成功している。以上の事から、本論文は博士（人間科学）学位論文として十分に価値のあるものと評価される。